

令和3年度 第1回教育課程編成委員会 分科会

開催時期：令和3年5月～6月

学科共通テーマ：①コロナ禍での実学教育のあり方(継続課題)

②チーム医療実現のために必要な教育のあり方について

③その他、業界が求める学生像など

看護学科

2021年度 第1回教育課程編成委員会分科会

開催日：2021年5月26日

場所：出雲医療看護専門学校

参加：常島根県看護協会任理事 原 徳子、

出雲医療看護専門学校 副学校長 神田 真理子・教務副部長 落合 美枝・学科長 堀内あさみ

議題と内容：

1. コロナ禍での実学教育のあり方(継続課題)

〈学校〉

先日、島根大学医学部附属病院の田中看護部長との会議の中で、学校はコロナ禍で、昨年度は臨地実習にほとんど行けず、技術の経験ができていない学生を病院に送りだしている。一番心配なのは、昨年度の卒業生が臨床に出てどうしているかということであったが、今年度の新入職者は、たくましく元気がよく、例年4月中旬にメンタル的不調者がいたが、今年はいないということだった

活気もあり、新入職者同士の連帯感、仲間意識も例年よりあるということだった。

また、入職したばかりでわからないこともあるが知識・技術も差がないようだと言われた。

〈看護協会〉

・看護学校でも大学は4年制で2・3年次に実習を終えているが3年制の学校では実習ができていない現状があると思う。病院でも新入職者の実態はまだボンヤリとしたものであるのではないか。

協会では、コロナの現状を踏まえた研修はまだ計画していない。現在、病院に現状調査を計画しており、調査内容を検討している段階である。調査の結果で課題が見えてくると思うのでそれを踏まえて研修を計画していく予定にしている。

・コロナ禍での基礎教育の取り組みも、それぞれの学校で工夫して学内実習に取り組まれており充実した内容になっていたのではないか。コロナ自体は不測の事態ではあったが、学内実習の工夫ができたことなどを考えるといいこともあったのではないか。

・コロナに関係なく毎年、新人教育プログラムとして1週間の研修を計画している。内容としてはメンタル、仲間意識、横のつながり、具体的な技術についてなど希望のあるものに関して研修を計画している。それ以外は調査の結果を待ってから考える。

・島根県の方からは、例年歓迎会や多職種との連携を兼ねた交流会などを実施し、コミュニケーションをとるようにしていたが、昨年からはほとんどのところが中止している。そのため、横のつながりやコミュニケーションがとりにくいと言った声があったが、いつも連休明けから聞かれるメンタルの不調に関する情報はほとんどなく、現在休んでいる人も少ないのではということだった。

2. チーム医療実現のために必要な教育のあり方について

〈学校〉

・学校としての取り組みでは1年生の早い段階で三瓶青少年自然の家での4学科合同の研修を行っている。その中でチーム医療についての学科を超えたグループワークやオリエンテーリングなどでコミュニケーションや職種の理解を深めた。講義においても臨床工学技士学科と看護学科、理学療法士学科と看護学科など学科合同の演習を行うなどチーム医療についての理解を深

めている。

〈看護協会〉

- ・チーム医療に関しては、「摂食・嚥下」や口腔ケアについて、看護師だけではなく理学療法士や歯科衛生士、言語聴覚士の職にある人たちが参加できる研修を企画している。2日間で実施し、土曜日を挟むようにして、1日でも参加可能にしてできるだけ多くの方に参加してもらえようとしている。
- ・出雲医療看護専門学校の場合は4学科あることは大きいと思う。チーム医療を理解するには恵まれた環境にある。

3. その他、業界が求める学生像など。

〈学校〉

- ・医大の田中部長との話の中にあいさつなど社会人としてのマナーができない人が多いということだった。学校としても最低限挨拶や報告・連絡・相談ができるように指導はしているがなかなか徹底できない現状にある。
- ・学校としての取り組みで臨床工学技士学科以外の看護学科、理学療法士学科でもME2種の資格試験に取り組んでいる。合格すればMEの知識を持った看護師として就職が有利になると考える。また、看護師免許取得後にもう1年臨床工学技士のコースをとることによりWライセンスを持つことができるようになる。訪問看護などでも呼吸器の管理など看護師が実施していくようになることを考えると、Wライセンスを持つことで就職が有利になることも考えられる。こうした取り組みや各職能団体との連携も重要と考えている。

〈看護協会〉

- ・Wライセンスなど良い取り組みだと思う。
- ・コロナ禍で人と接することが少なく、またマスクをしているため表情がわからずコミュニケーションがとりにくい現状がある。その中で、社会人として、組織の中の一員としての意識をもたせることが大切なのではないか。
- ・社会人マナーについては、社会人レビューという研修を行っている。この研修では、社会人1年生としてどうしていくかなど考えさせるような内容としている。
- ・協会の研修について
セカンドレベル研修など県外の講師は全てリモート対応にしている。県内の受講者は、感染対策をした上で協会に来てもらっているので安全であると考えてもらって良い。協会の研修にはぜひ参加してほしい。

以上

理学療法士学科

2021年度 第1回教育課程編成委員会分科会

開催日：2021年5月27日、6月1日

場所：メールにて意見交換の上、電話（およびZoom）にてディスカッション

参加：太田 真英（安来第一病院）、福田 淳（デイサービスサイン）

出雲医療看護専門学校 学科長 鈴木 操

議題と内容：

1. コロナ禍での実学教育のあり方(継続課題)

(太田委員)実学教育の意味が解らなかったので自分なりに調べてみました。

「社会に出てから即戦力となる教育」のような意味だと思いましたのでそこを中心に考えます。

- ・今年度の新入職員の特徴は、ペーパーペイシメントを多く実施しているので初期評価等はある程度できているのかなとは思いますが。
- ・一方で、プログラムの変更、アクシデントの対応等は実際の患者様を経験していない関係で苦手なイメージがあります。

例えば、プログラム実施前に血圧を計測するが、実施中に計測せず血圧が低下している、また、患者様の自覚のない血圧低下が起きている時にどう対応したらいいか等が瞬時に判断できない、などのアクシデントへの対応が出来ない傾向にあります。

その辺の学内実習が必要かと思えます。

(鈴木)大変参考になるご意見をありがとうございます。特にアクシデントマネジメントを含めた学内実習プログラムを構築する必要性を感じました。これが「実学」につながると気がきました。

(福田委員)LIVE実習：教員が病院へ赴き、ヘッドセットしたビデオカメラにてLIVE映像を学生は視聴する。教員は解説を踏まえながら評価やプログラム計画、実施を行う。プログラム計画や実施に至るプロセスを学生が考え、知識を深める。

(鈴木)参考になるご意見を賜りありがとうございます。

コロナ対策の中から、遠隔授業が普及し標準化されつつあります。実習の在り方もLIVE映像などでのやり方を実現するのに先生のご意見はとても良いアイデアだと思います。

2. チーム医療実現のために必要な教育のあり方について

(太田委員)・職種の特徴（仕事内容等）を理解する。

- ・他職種の仕事の流れを理解する。

学内での練習としては、他職種から質問、意見に対して否定しないこと、どうしたら実現できるかを考えられるような思考回路を構築すること。

専門用語を使わないで、自分が患者様に対して実施していること、考えていること、最終形のイメージを伝えられるようになることが出来れば、多職種連携は上手くいくと思います。

(鈴木)先生のご意見により、「まずは、お互いの職種の認識を深めるところから始まる」ということが「チームワークの基本」であると改めて認識致しました。チーム内、患者様とのコミュニケーションにおいては、相手の立場に立った考え方、行動ができるかがポイントだということがわかりました。ありがとうございました。授業科目「コミュニケーション論」、「心理学」な

どでこの考え方を伝えたいと思います。

また、言語化⇔イメージ化といったような能力を鍛えたいと思います。

(福田委員)IT リテラシーと IT の活用 (ただ使えるというだけでなく、業務と IT をマッチングできる能力→業種関係なく共通して必要な知識・スキルとなってきた。チーム連携していく上で、IT 技術は重要なファクターであるため、基本的能力として必要だと思う。

防災の知識、意識。

介護保険では、今年度の報酬改定で BCP(事業継続計画)ガイドライン策定や災害に対して地域との連携について明記された。状況により、リハビリテーションの枠を超えて動く必要性があるという認識を持つことが必要となると思う。

経済学 (お金や社会行動など)。

(鈴木)共通言語としての IT スキルを持つこと、リハの枠を超えて動ける人材づくりをすること、お金の動きや社会行動を理解すること、それぞれがとても大切で、「チーム医療に不可欠である」ということに共感いたします。カリキュラム外においても、目的意識を持った教育を展開したいと考えます。

3. その他、業界が求める学生像など

(太田委員) 今まで色々と考えてきましたが、今は、「メンタルが強く、常に安定していること」にいきついています。

医療職として自分自身を理解し、自分自身でメンタルコントロールが出来る事が一番重要だと思っています。

(鈴木)社会が多様化し、患者様や医療を取りまく環境も多様化している現在、メンタルの安定は不可欠だと思います。ありがとうございました。

(福田委員)介護保険分野における理学療法知識。 介護保険分野で働く理学療法士は数年前と比べて多くなっている (はず)。介護保険分野は、今後さらに対象者の能力改善・維持への期待が大きくなっており、柔軟な思考性をもった理学療法士への需要は一層高まってくると思われる。

(鈴木)先生のご意見に強く共感致します。

人生 100 年時代、ライフシフト (年齢に関係なく、人生の方向転換をはかる) が叫ばれる中、それらへの支援ができる職種として、PT への期待は大きいと思います。教育目標に据えたい考えだと思います。ありがとうございました。

以上

臨床工学技士学科

2021年度 第1回教育課程編成委員会分科会

開催日：2021年5月19日

場所：出雲医療看護専門学校発信 ZOOM 会議

参加：島根県臨床工学技士会会長 福田 勇司

島根大学医学部附属病院 ME センター技士長 明穂 一広

出雲医療看護専門学校 学科長 加藤 智久、副学科長 中山 弘幸

議題と内容：

【令和2年度教育課程編成委員会より】

コロナ渦での遠隔授業対応で学生の理解度がどこまで上げられるか、チーム医療がうたわれている中、それぞれの職種の立ち振る舞いをどのようにするかなど議論がなされた。今年度も新型コロナウイルス拡大防止対策の中で遠隔授業対応も取り入れていかなければならない。カリキュラム改正などでチーム医療に関する事項も入ってくる。業界との話し合いを踏まえて学校と業界との意見交換をしていきたい。

【議題】

1, コロナ渦での実学教育のあり方

昨年度緊急事態宣言などで遠隔授業対応が始まり、現在は学生にも定着しつつある。始めた当初は教員も学生も不慣れなため、うまくいかなかったり、学生の様子が気になったりと様々な問題点があった。

現場が使用する遠隔に関しては学会や研修会が事例で挙げ荒れた。遠隔を使用するメリットとしていつでも気軽に参加できる、チャット機能を使い意見交換ができるなど、デメリットとして聞いているだけになるので理解しにくいや集中力が途切れるという意見があった。遠隔授業に関して原則20分授業×3回+αで1コマ扱いにしている。20分の授業に関しては学生の集中力を保つことができ、寝る学生もいない。授業効率としてはよいのではないかと考える。しかし、対面で得られる学生の状況や、学生からの質問がなく学生の理解度としては疑問点が挙げられる。遠隔授業用に教科書ベースでスライドを作成し、極力意見交換をしながら進めていくと理解度も確認できるのではないかと考える。昨年より開始された遠隔授業に関しては第2種ME技術実力検定試験や、国家試験の合格率などで成果の有無が得られる。一度今年度教員が試行錯誤しながら進めていき、結果を踏まえて改善していけばよいのではないかと意見がでた。

2, チーム医療実現のために必要な教育のあり方について

前回の教育課程編成委員会でチーム医療において臨床工学技士の立ち位置は他職種の潤滑剤になるのが必要という意見が出た。現在病院ではチーム医療を行うがために、医療の分業化が行われ、専門領域と専門領域の間のどちらの職種でもできるような業務でも丸投げ状態になっている。分業化することにおいて、個々のスキルや経験の不足につながるか等の意見が出た。チーム医療を行う前にお互いがお互いの職種を理解し、現在患者に必要な治療や支援を共通認識しなければならない。チーム医療を実現させるために必要な教育は、自身の職種だけではなく、他職種の業務や立ち位置を把握することが大切である。

3, その他業界が求める学生像

新入職で入ってくる職員は、業務を自ら覚え知識や経験を蓄えることが少ない。時間から時間で働き、休みを重視する職員が増えてきた。教えてもらって当たり前、その病院に入職すればすべての業務がすぐにできると思っている新人が多くなり、学生と現場とのギャップがあるように感じる。臨床工学技士の専門性を早く確立し、様々な業務をこなしていける人材が欲しいとのこと。自身の仕事に興味を持ち向上心のある学生が望ましいのではないかと考える。

以上

開催日：2021年7月

場所：電話および文書にて意見交換

参加：出雲市立総合医療センター 藤江 美穂

出雲医療看護専門学校 糸賀 亜美

議題と内容：

(糸賀) 昨年度の会議では、学生のコミュニケーション力の向上について検討していただきました。学内演習（コミュニケーション演習）において、他者評価を取り入れること、振り返りの視点見直しについてなどご意見をいただきありがとうございました。

昨年度に引き続き、感染防止の観点から、校外の方との交流をはじめ、学内演習なども積極的に実施ができていないのが現状です。

1.(糸賀) コロナ禍における、コミュニケーション力の向上を目的とした取り組みについて何かご意見やご提案がありましたらお聞かせいただきたいと思います。

(藤江) ・他校の言語聴覚士学科と交流する。

ZOOM など、遠隔でセラピスト役と患者さん役に分かれて自由会話をを行う。設定を聴覚障害、失語症など決め、それぞれがお互いに評価を実施する。

自校では遠慮して言えないことも、他校の学生には言いやすいなどの違いもあうかもしれない。

・実際の患者さんと ZOOM など遠隔で会話をする。

当院言語聴覚士の親族で、失語症の方がいるので協力が可能。必要があれば連絡をください。

2.(糸賀) 昨年度のご意見について。

・義歯の取り扱いの講義を取り入れてはどうか。

・嚥下障害の内容について、経口摂取困難例、代替栄養を選択されない方への関わりなど教科書では学べない内容を取り入れてはどうか。

・呼吸リハビリテーションを取り入れてはどうか。

現在講義のコマとして計画・実施はしてはませんが、嚥下障害の実習前指導や学内実習のコマの中でより実践的な内容として講師へ依頼しようと思っています。

呼吸リハビリテーションについては、講師として安来市立病院の理学療法士を招いて2コマの講義を受講しました。

(糸賀) その他、学科の教育に取り入れた方が良いと思われる内容があればお聞かせください。

(藤江) 特にありません。

以上